

「あつという間の50年」

もう10年ほど前になりましたでしょうか、私の村の門徒さんのお宅で50回忌の法事を勤めさせていただいた時のことです。

お勤めの後に、「私は僧侶になってもうすぐ20年になり、やがて還暦を迎えることになります。確かに仏事はこなしてきましたが、こと仏法聴聞となるとあまりご縁の場を作り得ておりません。誠に不甲斐なく思っております。しかしながら・・・」というような話を10分くらいした後、参詣しておられたお婆ちゃんが、「ご院さん、何を言いなされるんやな。私は今日こうして母親の50回忌法要を勤めさせていただいたんやが、私も今年でちょうど90歳になりました。母親を亡くした時は40歳であった。子育ても一段落したところで、これから母親の歳まで生きるにはまだ30年以上もある。百姓をしながらこんな生活が続くのかと思うと足がすくむ思いであった。

あれから50年が過ぎ、私も90歳になってしまった。振り返ってみると、あの時に思ったことは一体何であったのだろうか…。来る日も来る日も田を耕す生活に明け暮れ、自分を顧みる時間などなかった。5人の子どもも、どのように育てたか忘れてしまった。そんな中、今日こうして母親の50回忌の法要にお参りさせていただけるなんて思ってもみなかった。あれほど母親の歳まで生きるのが長く思えたのに、あつという間に過ぎてしまった。まさに『夢幻のごとく』だ。とにかく過ぎた50年は早かった」と声を大にして言われたことを今でも覚えています。そのお婆ちゃんが昨年の暮れに99歳でお浄土へ還られました。「自分の家族や、自分の人生に本当にありがとうと言いたい」と、亡くなる数日前に家族に言い残して逝かれたそうです。

私たちが自分の人生にふと立ち止まり、改めて自分の生き方や自分自身について問いを持つということは、とても大切な意味があるのではないのでしょうか。清沢満之先生の言葉を借りれば、「自己とはなんぞや、これ人生の根本問題なり」ということでしょうか。さらに続ければ「自分が生まれてきたことや、生きていくことの意味、そしてどのような自分として生きることが本当の生き方であるのかと問うことが、私たちの根本的な問題である」ということでしょうか。

私たちにとって自分自身を問い直すことが、生きていく意義であると思うのです。